『何で其様ボロ糞に云ふね。』
『當り前や無いかい。二分や三分の金でビク〳〵しやがつて。』
『三分の金は拘めへんねけど、活きた遣ひ様がし度い依てナ。』
『甚い砂な事云ふねナ。何時ぞお前に死錢遣はした事が有るか。』
『さアお前は死錢を遣はしやへんがナ。ウツかりすると錢が死に相に思ふね。』
『そら又何故やね。』
『今お前が云ふた藝妓は皆馴染や。馴染云ふたかて自分で線香つけて馴染に成たんと違ふがナ。いつでも人に連れて貰ふて馳染になつたんや、左様や依てに俺いの顔見たら滅多に錢出してると思ひよらへん。いつでもお辨慶に決つたアるのや依てに、俺いの事を辨慶はん云ふ名ア附けやがつたんや。仕舞ひには辯慶はんは古臭い云ふので逆轉してケベンさんや云やがんね。同じ錢を出し乍ら辨慶はんやのケベンさんやの云われたら三分の割前が泣くやないか』
『オイ相手は稼業女やで、今日は辨慶で來たか割前で來たか一目見て夫れ位の見分けの附かん氣遣ひはあれへん。若しも誰ぞお前に辨慶のべの字でも云ふ奴があつたら、一文も割前は取らへんがナ。』
『そんなら何かいナ。辨慶と云ふ者が有たら割前は要らんか。』
『要らんとも、俺が出したる。さア左様や依てに往き』

『ウーム。三分か。……』
『まだあんな事云ふてよる。往生際の悪い男やなア。』
『實はその……今日チョツと懐都合が悪いね。』
『こら云ふたれん、誰しも都合の有る事や。心配しいナ。今日の處は一時俺いが取り替えとく。』
『あゝ出しといて呉れるか、そんなら茲に百六十文だけ有るのん取といてんか。三分の内入……。』
『邪魔臭いがナそんな事。又一處で宜えがナ。』
『それでも預かつといて。そんで、あとは四十八文宛崩しで……。』
『冗談云ふない。さア早ふ身仕度しイ。』
　箪笥から着物を出して着替えて居る處へ歸て來たのが此家の鳴村屋、何しろ雷のお松と異名を取て居る丈けに表から大きな聲で饒舌り散らして這入て來た物でやすさかい、友達の清八は逃げ場を失ふて段梯子の隅へ小さふ成て隱れます。喜い公は着物を着替えたなりで、仕事場の眞ん中へ芋虫が頓死した様に平太張て仕舞ひよつた。
『まアお德さん大きに、へエ今歸つて來ました。何と暑いやおまへんか、へ大きに有難ふ。いゝえナ昨日あない喧しい云ふて呼びに來た物だすさかいナ。狼狽てゝ飛で往きましたんやがナ。往て見たら阿呆らしい、ホンの感冒だんねがナ。それを例の仰山屋、今も死ぬ様にウン〳〵唸つてまんね、妾い